

連載

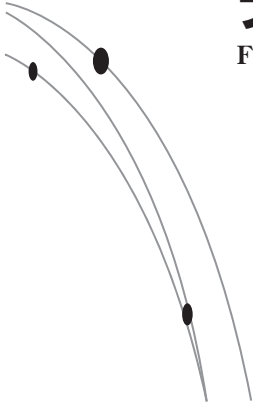
フィールド・アイ

Field Eye

ミュンヘンから——①

櫻田 涼子

Ryoko Sakurada



グローバル化に応じたドイツの人材育成

花火と言えば、日本では夏の風物詩である。暑い夏の夕暮れ時、花火大会に繰り出し、日本古来の温かい光の花火が夜空せましと打ち上げられるのを見る。これこそが、私の夏の醍醐味である。しかし、私が滞在しているドイツでは、花火といえば、大晦日の晩に、新年を祝って打ち上げるものようである。先日、ドイツでの大晦日を初めて体験したが、新年（午前0時）になると一斉に町のあちこちで、花火が打ち上げられ、大変にぎやかであった。ドイツ人の知人によると、新年の0時から24時の間、花火を打ち上げてもよいことになっているそうであるが、実際は新年の午前1時頃までの間に盛大に打ち上げられていた。ノルウェー在住の日本人からも、ノルウェーでは、花火は冬の風物詩だと伺ったので、ドイツに限らず、ヨーロッパの多くの国で、花火は冬の風物詩なのかもしれない。所変われば、風物詩も変わるものである。

この経験を通じて、私自身、考えさせられたことがある。それは、言葉や文化を理解することの難しさである。例えば、私とドイツ人が花火の話をした場合を考えてみよう。表面的には同じような話題で盛り上がるかもしれない。しかし、その実は「花火」という同じ単語から2人が無意識に連想している条件が、まったく違うものである可能性がある。もし、花火自体が、日本かドイツいずれにしかないのであれば、このような行き違いも生じないだろう。しかし、注意が必要なのは、花火自体はどちらの国にも存在しているが、その実際の意味や使われ方が各国や地域によって異なる場合である。この言葉の意味の違いを正確に意

識していなければ、その人が意味していることを正しく理解できないばかりではなく、大きな誤解を生じさせてしまうことにもつながる。このような言葉の行き違いが、些細な場面で起こるだけであれば、笑って済ますこともできるだろう。だが、もし、これが大事な交渉や取引の場合に生じたとしたら、どうだろう。笑い事では済まされない状況も生じかねない。日本でも、長らく英語教育の重要性が説かれているが、果たしてそれだけでグローバル人材は育つのだろうか。今後ますますグローバル化が進む中で、世界的に活躍できる人材をどれだけ輩出できるかということは、大変重要な競争力の根源になる。そこで、ドイツにおいては、グローバル化をどのようにとらえ、それに対してどのような人材を育成しようとしているのかを考えることにした。

ドイツでは、2006年から政府主導による Exzellenzinitiative（英語表記は Excellence Initiative。以後、エクセレンス・イニシアティブ）が実施されている。これは、ドイツ連邦政府と各州の政府によって行われているもので、その意図は、審査機関の1つである DFG（Deutsche Forschungsgemeinschaft）の説明によれば、今以上に国際的な競争力をつけ、ドイツの大学や学術界の際立った業績に注目が向けられ、ドイツそのものがより魅力的な研究の場所になることを目的としている¹⁾。すなわち、国際競争化する研究という領域において、ドイツ自身の存在感を増すことを目的としていると理解することが出来る。

このエクセレンス・イニシアティブは、3領域から構成されている。① Graduiertenschulen（英語では Graduate schools）と ② Exzellenzcluster（Clusters of excellence）と ③ Zukunftskonzept（Institutional strategies）である²⁾。1つ目は、若手研究者促進のための大学院、2つ目はトップレベル研究のためのエクセレンス・クラスター、3つ目の Zukunftskonzept は直訳すると、将来構想（計画）ということだが、英語表記をみると、構想というよりはもっと具体的かつ戦略的な計画を意味しているようである。新聞等ではこの3つ目の大学はエリート大学と称されている。このエリート大学に選ばれるための資格は、①と②にいずれも最低1件ずつ選ばれていることが条件となっており、それをクリアして初めて審査される資格を得る³⁾。審査段階には、ドイツ国外の審査員も参加しており、より国際的な視点からの審査がなされている。

これまで、大学間で差をつけないという方針を採ってきたドイツ国内で、このような重点校が置かれ始めたことは、ドイツ人にとっても驚きであったようである。このエクセレンス・イニシアティブは、計画当初は2006年から2011年までの予定であったが、その後5年間延長されることが決定し、現在は2012年から2017年までの第二ラウンドのエクセレンス・イニシアティブが実施されている。予算としては、2006年からの5年間で総額19億ユーロが、2012年からの第二ラウンドでは27億ユーロが用意されている。2012年の6月に、2012年以降のエリート大学が発表されたが、新たに5校の大学がエリート大学になり、第一ラウンドのエリート大学(9校)のうち3校が外され、全11校が選出された。すなわち、エリート大学の地位も不動のものではなく、実績如何によって、入れ替わる仕組みであったということである。これによって、大学間の競争を行わせることも目的の1つようである。

それでは実際に、ドイツの大学はどれだけグローバル化しているのだろうか。ドイツには、様々な国の学生や研究者が訪れてきている。私が実際に出会っただけでも、優に20か国以上から学生や研究者が集まってきた。

また、ドイツ学生の英語力には、舌を巻いた。今回私は、エリート大学に2回とも選ばれているミュンヘン大学(LMU: Ludwig-Maximilians-Universität München)に滞在していたが、ここの学生(博士や修士の学生だけではなく、学部学生でさえも)は、専門の授業を英語で聞き、理解し、流暢な英語で質問や議論を行い、更に英語によるレポートや試験を受けることも、なんなくこなしていた。例えば、授業内でドイツ企業を訪問し、インタビューする際も、その授業が英語で行う授業であれば、インタビューをする学生も相手先の企業の方も、双方ともに英語による質疑応答を行っていた。同僚に聞くと、ここ十数年でドイツにおける学生の英語力は格段に上がっているとのことであった。

あまりにも学生の英語が流暢なので、ある修士の学生に、何故そんなに英語ができるのかと質問してみると、大体の学生が学生時代に留学経験があり、かつ外国から来た友達とも英語で交流するので、このくらい使えるのは当然だという答えが返ってきた。同様の質問を学部学生にもしてみたが、同じような答えが返ってきた。実際に、何人かの学生は、これから海外留学の予定があると教えてくれた。

彼らの語学力にも驚いたが、更に感心したのは、学生が、ドイツのことについて、よく理解している点である。例えば、政治についても彼らなりの意見をもっているし、社会や企業の仕組みの話をして、ドイツの場合は、こういう歴史があるからどうだとか、その仕組みにするためにこういう議論が行われたとか、実によく自分達の国や社会のことを理解していた。もちろん、学生が所属している大学や学部によっても違いがあるだろうから、私が実際に体験したことが全てではないが、これだけ英語が堪能で、かつ自国に対しての深い理解が学生のうちからあるということは、感嘆すべき点である。

日本でも文科省が平成24年度グローバル人材育成推進事業を実施している。この目的は若い世代がグローバルに活躍できる人財となるべく育成を図る大学教育を財政的に支援するものである⁴⁾。当該プログラムのように、日本の若者を成長させる機会に焦点が置かれたグローバル教育が日本でももっと支援されるようになれば嬉しいことである。なぜなら、冒頭の花火の例のように、グローバルに活躍する人を育てるためには、語学力はもちろんだが、それだけではなく、自国とは異なる環境に飛び込んだ経験、異なる風習や習慣を体験すること、他の国の人々にきちんと説明できるだけの自国への深い理解が必要となるからである。私自身も大学教育に携わる一員として、微力ではあるが、学生の語学教育の充実とともに、こういった深い洞察のできる学生を一人でも多く育てられるように努めたいと改めて思った次第である。

- 1) 当該プログラムの共同審査機関として、他にWR(Wissenschaftsrat)が関わっている。
- 2) 詳細はDFGのHP(http://www.dfg.de/foerderung/programme/exzellenzinitiative/allgemeine_informationen/index.html)および当該英語サイトにて閲覧可。
- 3) WRのHP(http://www.wissenschaftsrat.de/download/Exzellenzinitiative_Dokumente/exini_leitfaden.pdf)にて詳細が確認できる。
- 4) 詳細は、文部科学省のHP(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/1326068.htm)にて閲覧可。

*注2)～4) はいずれも2013年1月時点でのものである。

さくらだ・りょうこ 福島大学経済経営学類准教授。最近の主な著作に「フラット型組織における昇進展望に関する実証的一考察-キャリア・プラト-現象に着目して-」『福島大学地域創造』第21巻第2号、20-34頁、2010年。人的資源管理論専攻。